草庵集家求該解七

秋

意上

草庵和歌集蒙求諺解巻第九

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

哀傷上

沙子尼入道大納言家四季百首より

嵐吹山はおりくれをりまろやかなる人をうけてちりて
ちりやくくしかぜ。前方よりとゝ云ひ也。嵐よ吹れて。前方をちりを行
をいとやきれをれば。そのおくぐくをちりを行
へどもまぐいしもおさだ。心しらぬ人をこひちぐ
ある也　若世川岩信たゆくゆくあるのちりやくくと人を行るとい初
て〜　若よきくいせのすくうの山川はちりやくくより我ちいまこ
ふれ　新拾集　又一首の心　明月つ
小ちりくくるゆく　家隆続古今二　こしかりあるれ。如何よハ非。をハ嵐や岩

なびかれば糸をかけてといふも縁乃詞なり

初恋

つくばねの新桑まゆの糸なれや心ひくまでみだれそめけん

筑波嶺。常陸なり。新桑眉は。蚕の桑の葉をくひて作る。その眉を引おして糸となすを云。ひきまゆとも云。新は新也。桑の葉のあたらしきを云。神恋の方へも縁有。これらは自詞の作意也　筑波嶺の新桑眉のきぬはあれど君がみけしぞあやにきまほし　万十四　思ひくも乱ても。糸の縁也。心ひくとは糸の引まとふるよりそのまゝ取まはしたる也。それは神乃縁にて深き心をそへたり。糸の縁也。なれやは也乎也。やは疑ひ也。よみしげんは誰かの心にそむる疑ひのありがたくかうして。此の世に乱まそめたるにて也

へ前参議大臣家三首ねがひしんを

いし鶴はなかりし夜ごろ乃なかなかに神無月とて神無月

神無月は夏の鶴を見る座にすゑて置き。七月神無月と云。神無月とは神嘗月とも同じ事也。小鶴の事也。大鶴の名也。初鶴の恋の事にて。鶴の事を指ると本指とを云。みかの原ゆき契の横業乃なれば鶴の事と云ふで。まつる　人丸歌　古今　やどかる白鶴のこゑをのこる雲乃ぞ

合せはるかに　藤原長家　拾遺冬　なきかねば。神無月ゆへ鶴は本来訓　なる事の。恋はまづなしぬ神の恋は方にそへてよみあり　なるれば

皆人のこに何をかもとひといふ事もひしまれども　伊物　一首の恋は。神無月にて。身もと合ても。此世の事ゆへまづなりぬれは事も神のあるてと云て神恋なれども。恋に訓なくれども神のあると云

縁也。身は調にたとへてよめり

後京極摂政良経家三首に

尾花をそへ尾花かもとれまうれや今より下にもゆらうひハ
尾をこすそへそは。春ハ草のよく萌出るそかれ。我さと燒也。若草に
注を　尾のべは尾花がむすぶ思ふ事今さらに我ぞ初ハ思ハん　万十
我らハそけるへの世に尾く枯ざれ成るわいぶれやけらる茅
の葉たり。文を作てつゐにあり。　時きて枯行小野の淺茅に
は今たらんぞそへしども。えける　小町ヶ姉 古今五　まの中けたる絲は。下
つ草のくへあるを。下萌とぞ。又燒すてらるわるれば下にて
草ものへのもゆる事をいひて。我思ひの上にいはんとせずして。仏の
中にもゆると云ふをのべたり。尾花がおれは葉ハ。思ふ事のあら
て。我思ひの事をあらはによりてよめり。今より下にもとハ。初ニハ
へ今はよりけるぞ。人をもひとへに思ひて。人にもしられね
ど。下にと云也。総ていふに思ふよ。下にゆる。下に忍しきたると云。
下の字ハ。我心をゆるとすと云也。心ハ底に有て人のさすへけん也

心にあくけ五首絶えとろむの下よくゐし引合たへし。報物を云へハ。
胸中の熱くたるを火とよそへて思ひにもゆると云。孟子萬
章篇云。不得於君則熱中云云　上ハ首下寄湖玄の下引合
すへし

妙法院二品親王家八月十五夜哥合より

寄月初恋

思ふそいつしか月ハ宿るかくれなきじふに忍ぶる袖のなみだに
袖ぬれんば。かくまで涙の。ふかく落べき事とは我さへしらざ
りしを。ぬれまさる月の影さえてやどるまで涙くハ成る
ぞと也　後撰　相よ合て物思ふ人の我袖にやどる月さへぬるるがほなる
る　雑　伊勢　袖思ふ我ぞかれたる草の袖をとくあてそなけ

ふ家小　従三位頼政 續古今一
清け子左大納言家旬十首よ　入道イ　思

いうふさんやくしのこうてそたぐべきもたのこぐてれいえ流ようろき
ちるちてに何りあやれうまきていそんもしのこうてそたぐれ
名所伊勢物 滝く思いさんやたぐれ滝ぐちるべきやて逢事も有べきうと。
思くしもそのこがきいん人のおそれだいで有べきもけうぐと。
さていうたさんと上るへくしてよりいうたせんけうぐうきせた
ちぐ滝ぐそのるくしに月出湘流ようり 定家卿雑上 産右えいうたせん
と流たごうるぐちるなきと云ふも有ぐまりるけいうぐせんとも む
べ秋の月かも竹ぐれた世のけくさをもちぐさうんと世よ
さへ湘れ流るちぐたいうふせんと也けうぐいさあるそ也 いうたとん
室乃八橋く宿も小衣の烟をうたんまぐてん 後撰 小衣 いふせん滝
の神ようろうれる現のはい変をぐたうんず 定家卿拾遺 小衣

雪衣を

えぐちるくれ古野れ滝を
えぐちるくれ古野れ滝を
えぐちるくれはえちるくれ也ぐいは助字也 引ぐちるくれ以今ちるくれ
命れうぐ我やまちるくれ人やとうれと 後撰 古列 みちのくれいうぐ也
ぶしえぐちるくれきはくくてよつぐの石文 形名抄 古雑下 ちるくれ約て
ちうう滝のうも神く流べきに音ぐうり雪て神く流ふ雨
うはえちるくれ我衣いちるくれ計れぐ雪也ぐして
うや滝の神く流るうも也滝い涙の事をうり 音くのく
れうくしやこしうはうれ滝ハ今日こうて神く流うれし 後撰 新古衣
名くちるれのたきも音くのきくうり神くれうれてれり
有家卿 拾遺 小衣

金剛寺のく 宗瀧衣

ちぐれてれうこうれちるくれ神くうみぐれ滝くうもう
思いやく心の内乃滝ちるれや杉くはうれど言のきこうれ
三条町 古雑上 滝氷乃ふく 石ぐう滝なくも小橋ぐうれても

うんうん人のうそ免（後人の詩古春上）なぐれてとい世上へ流布とう事也。
名のそぐれぬゆうにとぞ心の内こ湖をとけども。どろく神こ湖の滝
りこれあれい名のそぐれん事のうきた神の湖れ滝のたくも
うなぞ。ぞもかいあうあうあう也。神ぐい哉也

入乃古果つ待家あくふ首こ　思不言恋

なくたちふこうたちあくふ仏てそのくうも人はもしとうもん
何ゆくこ思いうあうるる事で。君ゆくこ思てあうる事なれい
考こたむべき事うるんなどとうう事でと思く
ぐどうして思の程をもたうせうれ事なれぐどうもして。
人のうけ引ぬ河い。都てううぐきゆくこうあうる也ぐと
ぞうして考せうれとも也人い思こ人也

梶井二品親王家三首　恋恋

うれ伝ぬうなるくふつまて中くにわるもんをもしうれつく

恋ゆううぐ。ぞぐ世間向こ仏角とく訓ざうう中に人ぐうあ
らたうて恋乃仏を知てもいうんぐだ人仏てをい
うれど。直こいう伝つひぐきゆく也ぐいてあるいぐに事うう
中くにぐにも也。人布ての方うてもゆゆ。孫の春の西こ仏訓恋
いまぬうれれ事也

清少納言大納言家十首（句合）　寄湖恋

姫ふうあうふ煙いうぐどうも中しあうくやうにいでれ濱
湖上。れぐ姫を乃うあ人。烟いうぐあ也。烟のたくあく思ひ
の有くいうんぐけ引まぐき事なれども。ぞあうしてもあくれれ
ばぐく思いのあうくぐうあうて。ぐいやうんぐでんとも也思い
ぐ火をうて胸乃ゆうあうを。ぐうのうんとうを也。思いよ。ぐる
形ぐ立ち同じ仏也。悲火焼（シンキヨウク）心曲（白氏）心思焦（韓文）思焦（同）
熟中（孟子）出　此類いつまりもはーぐ也。ぞあ濱いぐのれ事とう云

所也。江州大津の東也。矢走へ渡る舟の出る所也。摂州にも
同名有。芦屋の東也。思ひをおもてやいはんといふを言葉の
涙へいひかけたる也

玄旨申ニ

みぐるしきてとほどぞてごゑみてそ人またどおさふる袖は思ふすゞどう
哀らはくの思ひすらずるを術なく乱れ袖よしなきなりに
四 思ひ出也。それは思ひ給ひてもさゆるし給へはあらそひてそへん
乃ぞんかね一ツて。やかずどうの衣乃袖してそをさへて志のべくらひて。
日れみ下知する也。袖して涸などともさもさへ思ひでくらひ思
のゝなしたまへる也。思ひすらずりは。思ひす事をとゝて。らめくと
云なをも本哥にまりてみくみしくはらそゝぞや給ふぞも也。思ひより
まりの事をけりてなし也。給はまさしくやや也
いふりて後とそそまし心中と神みもいまは。あまへかみせよそ

惣じて涙は。ゆくそをさへてもをさへかねてこぼるゝを。袖々そ
をさへかくさむ物也。心にも袖にもおさまる涸なれば。えたへみお
おせ給ひきには。いかなれみてら。涙ぞみえんとの也。此いはいつも
みて也　いかにかてしのばじと命さへあらばおもへ夜れおもひも
しらすれ　いかにしてかく思ふてふ事をだに人づてならで（拾遺一　読人不知）
君にかたらん（新古今　大和物語）

金蓮寺十首歌合　思恋

思ひあまりそとはいはでやすみずり袖よりかふかくなれもこそすれ
思ひいでゝ。前の寄滝とおなじ。涙川涸の深きを河にたとへ
ていふ。涙の淵も同じ心也。又仏涅槃の時摩耶夫人下りて
棺の前にて悲しみ給ひし涙の雨のごとく降りて河をなしも
有。又詩にも涙河とはきこゆ。世説曰人問顧長康哭桓宣
武之状曰鼻如廣漠風眼如懸河決聲如震雷破山涙如傾

河注海 大注曰父母兄弟。命終哭泣。所出目涙多。四大海水。伊勢の名所に涙川と云あり。此川涙の深き事なり。此神乃もろもろみ。仏奥也。志ゑ出ぬ。ちがみいろと世く物をれい。涙を神として世くを。神のもろもろみと云也。持業釋也。神ともろもろみ。業のもろもろ涙乃こぼれぬ世に。と世くを。もろもろ足とをもろもろ。でを世。ぶれを神の外れもろもろみと。よろも

河乃龍大神玄家ふくおやしろを

ようにいべふらもとよりの涙川 神ともろもろのもろもろみ

ようさばとへぬりて云詞也 春月のあ 横を世けで 潮 ゆ

てもとぶみ乃り刃をしりろもぐ乃みでうさ 志考 古哀 潮を注ぎと

世けども世ふまおまりて流 まおへをもれて。今けは是非なし。

ふくなどろもをば涙川がよどみをゆて。ゆとろれ潮

は、庭のもろもろ物をれて。我仏乃ろもろ仏を思ふ。ぶれをお

ふくと云事の足えぬ世ふ。かぐ。ろもも

玄勝 茂示 宗基 ふも世行ふ十首

世ふもろる涙の川乃ふやき潮いををなのつろ成ふけるふ

世ゑの神也 早さ潮ふみろあ世しせば我神の涙の川ふく

ふもれを 侯人家 名古屋一 詞をとろ。せきろもぐろい。流分涙をせられてを

せきろれる乃也。川の瀬乃ふやきふいぶ流の音れ多く立和ゆ

ふもれ世。世ふ。湖乃ゑふ流れて川の瀬れ者のふろもろ成

ふふふも世。いろろへ経乃ん也

長庚 長秀 家立首ふ 家池玄

おくぐぶふいふ紅け池ふせく水れふるたつをそすしろれわる

かくぐぶふいか稲ふも世ふもの乃ふ かくぐぶたえやいぶさのは

も世乃ふもぐれ乃世ふ。世いを 家方注 格玄一 世いをふ世しふる

なげにさやうにも人いとうるはしきて云。實方の下に句乃仏し。
をのぶくことのはをゆるせ。奇の仏い手法をいて云ちこふこ。
今い思い兼てかくこいたなれども えいてずいくれば老根の
池乃ごくぷひつこせきこそぷよく深く成ふつ仕そい。
かなくこちこれて居ぐこさぷこの白いかくこもえいくね
ここ云ぷ池い水をせれこめてぷこうこねゆくぷうこ抱ぷた
これこしてこ乃ぷこねをいこねへこうけこうぷ

恋

ぷ恋なぷいつぞ涙をのしぷうたへしぷや我ぷたてはい
こをうここをこうゆこもいくず涙をのこかぐこぷこうへいぷれ
ゆこもこうこ他人ゆこ思いて云をいうこさこぷ我ぷをわ
こうつぐここぷこうへこうこ来いぷれへぷ
まぐこぷいぐ深くこうこそぷ仏のくれこきこぷ必こうへ人をこれへ

こうこ手ぷ仏いこもこ仏育ぷへこそぷれこうへぷ月前に行ぷ
絶ぐくしあまれ残金のりか火の下みいもこそぷこうこ神くく
あまの残金こて釣乃浦ずこかと汲て塩こ焼ぷこうこ
火の下こうこうゆこうれこも。神いこうこぷ我思いこ思へ
ゆへぷいのこも行こぷ神乃かいくべき手ぷれ
こも涙乃こうこゆへ方こうこぷへこぷを行てこう。
心い表へこれず。円こ有ゆへこうこう 我宿の毛桃乃
下に月清こ下ぷこうこうこそぷ思い消ぷん
烟ぐこ絶ぐこさこれこそぐ出こき 俊成卿 古今二 紅の色こいぐ
かくれぬの下に かいて云いこ思へ 女別当 古今二 云こぷ下ゆを
思へ世乃根ぐれ衣こ 俊くこ 古今三 涙こへ下のこい
をこうれぐや釣ぐこ火の新いこいげる 読人 此新いつれこ乃ゆ
ゆこいかこうかこいの後ぷ絶篇奇雲恋こ要

奥はうせ燃くくのかゞ火れすりもたるめうれ石てゞれ
吹くくゝ吹たきると入下へ吹ゝと心こゝろを引て玉の玉
髪このとまれ小雨降たきまくて出て 万二 春雨の志
きくくゝふるまゞのこれ桜いて有ん 河邊東人 万八 旬秀て風
の吹くく秋のかはつくゝさとあめ玉もちりける 文屋朝康 拾秋中 秋風の
風吹たけいかてそみまいき声よ秋出の鳴 後人不知 拾秋上 煙風
乃吹たくれいとゝ波たくる音て学ゆる 後人不知 拾秋下 もつとくん
学てもいくゝ世のかゝ信のさらゞゝ風ぞたくめる 古雅 拾下 外風吹
くくゝ紅葉のたくくこき蔦さ綿を巻るまさ 敦のくへ 宗の裏 家
こゝ皆頻乃傷也 旬秀の雨も乃ゝと降たけい出るれにもさく
ゝ飛こゝ入る 拾発 黒人の居たまる 椎柴の烟吹くくゝ出るくゝ
風 拾秋上 玉葉 外白さ花をこゝ手れ里見て 相吹くく出入乃秋色
逢坂集 紅葉のち社乃本法のかくゝふき吹くゝ風い社のまゝくく 月清 拾下

こゝくゝい変白也に集ゝおるは大方歌仙とこゝくゝ屋。松。後集
の屋の萩。雁。上。月。河。上。雁。寒。雨。長。秋。出。くゝ。一首のかい沖。
は風乃烟を吹くくゝかい火ハ下ゝいるあきゝも風ゝ吹たくれ
て煙のこくゝえゝゝ也。五ゝ出ゝのたりのゝ出ゝ
まゞて名乃たくゝ也ゝにあれくゝ也

清子 古大納言家十首 寄藻恋

いふせんゝゝ玉藻乃浦を法くゝ汐みゞまてのくれるこゝ世を
川の浦乃法さゆゝ信の下れあゝめ秋くゝもかくれなくゝ見ゆる也
そのこくゝ我恋も法会出ゝゞ多ゝ出ゝ恋のこくゝおゝ
ゝい秋くゝゞくゝ出ゝ色に出くゝ世間ゝかくれるこゝ世にたる
をゝいふせんゝ也ゝいくゝ恋乃思の下に出くゝ乃なゝかくゝ也
乳まゝいくゝ也ゝ下の法ゝ秋くゝ

おゝ一家四季百首 三

ならひがたさすごさにさよふ船人のくるしさよそにみくらべたらぞ
おもひやりは瀬ゝにて浪風のあらき所をこぎ渡る舟人はいかり
がたくおもひくべくれどもよそにみるはもめんてまづ其おもく苦しき
ふみ人のよそ目にはさしておもひかけぬこそわれ心のありし命
ともきこえぬへきさわぐくるしき心ありしとなり

寄煙恋

こと浦にすむひとの程ぞ夕暮のけぶりもさこそみつのと成なる
寺 此歌は我思ふ方へつれなくてこと浦にこそ煙立し 続千載(?)恋一
例 すまのあまの塩焼煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり 古今恋四 読人不知
下の心は思ひ消ぬ烟ぶりに譬へさまのそらぞまづ思ふ人が他人
に心のすがたをおもひよそへてさまをよそにたなびく程ぞあらむ(?)
我そのなせりしよそにすべくなくやさしかなとまじ(?)

我身からそれとも心のこがるゝなるべし

長秀月次百首に　寄煙恋

もろふしのそら絲よそに行煙りくまとそふるゆゑ我身ひとつに
一旦ハそのくれく煙ふしもつゝめはハわれくれぬへきならず其て
とく我思ひを忍びかくせどもつゝみはえ恋ひわすまじきが
くるしきなりといふ心なり。かはいやもと同じ心なれどさ
ゆかりやさゆりにそへをれと添へて云詞也此奥(?)寄恋に委
此題寄煙恋を書るに書者の誤也。心をみるべし心をとかる
説をみれハ寄烟も定かるべし

わかしこう歌を

うれしきやもゆのわかれにちてやれおもひきぬ中にみしきしさく
心のおもひにちてそれ心をよかくれて人にしられぬ我思ひとかく
しる人もなしけどしてきえてそらばおもひもありけなきに

何とぞ[illegible]せさせたまひしいは。縫殿の[illegible]也。[illegible]とそくてしむしたは。
あくの間をのいとそ。峡也。水をの寄たしむは。奥よそくていふなり。
とて[illegible]まれくしのあるあるにしせて。千島は寄ぬ。後の山系松[illegible]
山のかいそこうもみえどれ[illegible]くしいもきのくもくをと雪れふれば[illegible]
引ばいらにまらるつそ見引りとのかいあるあ今日しやいあ[illegible]
こそ 古訓 引けさをたるものこつみ[illegible]くまこ引れとのこいかくあねべ也 古訓
ふりあるさ 引さくあるはふも有ふ見引りとのあるあさもれむ
ろ[illegible]也 古訓 引ふりけくとのあるふに宮ふ世のこんはりろれあ[illegible]
せん 後ふるあ 古訓ト あるそいあは方也

重後院二品親王家五十首よ　恋

袖はくふはちるん後やおしいをくふ後のさきいんはたふん
思いせくとの四りの滝をれやあるといはれとあのゆ[illegible]
伺書有。滝水よお本有いとが滝のあ[illegible]也ば[illegible]

滝を洞り滝をくてふ也。とのの間よをれふてわる洞の滝い
袖に藤をばこそくふをれるばせきふてあはやをにすれ
そくふをるふ後じきもをれもふ袖に藤をくふ袖べ
いふせんふ也

市子の大納言家三代集絹おくふふくふ後ふそで
くふをふはで
思ふ衣袖くふるまでをく藤い我身を秋のあふくふ[illegible]ん 後拾遺秋中
涙川袖くふるまでをく藤い我身を秋のあふくふ[illegible]ん 後拾遺秋中
涙の藤をたばくふ袖ふをふ[illegible]ふ[illegible]ふ
袖もくふるまでよかれいそ洞のあれて人見ふかりて今まで
思いをそふのいもなく。をけふふ名ふふれん幸がうきかふ
までの宮にふをふ者。下る。間法四位。ず載雑一ふ 春の
秋ふ長ふ計なふふ松ふ思いをくたんふをそわふれふ下の

句をかくしたる也

たまつ佐和叢外下家集　忠岑

ながくとりなされし名にはあるとも涙川ふかきゆふべの(?)そのしがらみ

柵は川水のとゞめをせしむる也。袖のしがらみは袖にて涙をせく

ゆゑなり　涙川落る水上はやければせきぞかねつる袖の

しがらみ　拾遺恋四　貫之　さぞやせきかぬべき涙なれは袖の柵かくや

ぶらんは　後拾遺千載一　涙のあかりは悲しきと云名乃立すけんも

よ紬(ゆえん)せしど袖をせきとむるゆゑなれましきとはさへしも其

上にくもどれてうたかたの立べきや其段はあらじとしられなば

うれまくてすべきと涙く世のよしさてもさにさゆる有そこそ

なり　続後撰雑部述懐に逢もとめしくたる名乃涙のやう

とさこそく(?)いそかゆるさればこ紬(ゆえん)をもさ也

忠　涙　流

我おもふ人ゆくおつる涙とやせくとも流れおちぬせば河よらん

我(わが)名にたゝさゞりそうき人也。其人ゆくすゑ落くる事わたれはならさ

さく我のよ流りせむしてでれとしれども袖よりゆかなたりはうき哉

事也。流るゝやうは涙のそでむんと云縁也。さてのてを略したる

詞也。人くへそのがちらかゆるれをげ(あか)袖ひ堪なく成たそゞめ

身積上にる落君かく(?)涙よむれ云て　拾長(?)　かく(?)砕くよむらいて。

あいあまられまへてうしいをのとさまけき事とはゝさへ句ふ巻(まき)

別に出ぬ上田後りや花衣いたずの身まわまぬ方日いなし　古秋

涙もなれし人の契れ浅らよりかよ物とは秋風を吹　拾遺　平時治(?)　凡伴(?)恋

かつふるふこれ人まわときのやゝ秋れはさ田れのなぞてにさへ　長成(?)七十　後撰恋四

長秀は野社よ有りて家よみ侍しとき

せきとむる涙れ誰をかつせはいでもとむしかしたる名のなからん

よむひへどまろ縁也。どでとかるる也。せきつよひでもどきれ涙の

深き袖を思ひくらぶれば色のことへき事なるふ。たゞをみきいへばく
かくしみつくらみてびろきもんびぐ人もそろへてるりうれくれの色
きげいふざまんと也

前大納言家十首　思て久恋

年をへて思ひしかざれくるしさぬとよさき人でもしらぬかう
なにもとしれかるよ年久しく思ふとし向のくらしかりつを
思ひ付てもぴどうしれか也。子細は久しく年でとくろあるまじく今を
らしてかり人のきびしきにも。年比の思ひしくるしされなるべし。又
いひかりくれしくるべきとてよぢもくのれし付てくいりしく知らる也

なき佐　和義家二首よみ侍りしを

今は拾いてや待人よ今井のるみぐれ玉だにもうからく
紅の涙　辨躅弄二續集春部寄花述懐一妻。涙玉　歳衣
とみゆく糸はかはる人の涙の玉れをもぞぬるる　古今大秀　世をうみて

わがかすみは七夕の涙の玉これをとや成らん　涙人不知 拾遺　にあらぬさへはく
みられる涙なるたびに伸て年をへくれのきはかうされいかには
いかくはてきぬるそてわらんさわればんれもうんなくなくなりてさん也。
涙の玉は涙を玉にまなんれしうる也。持業釋也。博物志云鮫人
水居出テ人間ニ賣ル綃ヲ。臨テ去ルニ主人ニ索メテ器ヲ泣テ而出ス珠ヲ満ツ盤ニ。これは
涙が珠になる也。洞冥記にも此事ありいはれども常には
涙を玉にまなんでそなる也

寄草恋

後小しげさは後されどかられもましいそでその葉にれなさ草
我恋はさしかくれの葉なれやしげさは後されどもうらんのうき　古今恋二 小野小町
ゐまる思ふ斜そて人はいなましてらく思ひゆく岩にや信ま山
のもとなれごとく恋れしげさ事は後されども人のしげてかひも
なれをとぶらんといふ磐にも信まも奥引也　みちのくの

いくぞたのぶいえぞたづねかきたてよつぐのたづ文 祝詞新古新下
どもいそぎのとり衣ぬのの中に祝きるる心詞のつづき
うつもりそうつ中ゆい非。かい。峡の白も宵茶うる

行吉社に合ま

たづまでぞためぐぞたふる者れみぎまて下ひとりとがらもも
是。器。家の信ま心同事也。京の白い恵を也。茅をかけば祝ふ
ぞ、、ぞれ祝まて白の内ひとりとばうをたくせくい思へど
ぞ、ぞうたせてもうびうれ所は都てうろぐ、きまく一向ま恵び
こんてたづもわ也たづせわば人もたゆへたづ神ぞまそう。
礼と也と横音通也たづ也ぞ又詞の結ま能所乃
かりう有。此所ぞたる者い能也。たづ者い祝也。前化所化也
所い後。弟子い所也。能い他。所い詞也。此能山川の名を合たと
さへ。詞のつぎ点ましけをたづ。京の名合。物古の文脈をうる

刺のうたをたべ下ひたうたふ儀也。茅ま恵ぞ恵ぞ
民部卿家ふく　養恵
をたくのたてをう称めるわ人ぞ長ひく白のたびさかをい
文殊の萩い秋の中ひて白ぞ。ぞれ也。ぞれ也。ぞ事の
くてたげさ思ひるれども文殊の萩のぐく白ぞそく思ふ
人りひて事もたるもるる也。ぞ細いぼげてもたしうけ引ぬ
ぬいぞいの漂くうべきゆくぼげもぞあとたり。ぞ事れるれと。
文殊へいひうけうる詞也

学ノ詳ノ点

萩ふうさ萩ひうでの風ぞ。ぞもるるくふのるる神う那
京の源さ萩ぞうも。ぞをゆメ計ま神のあるるよいあ。秋
い和ぞうさゆへ。何とぞさ。萩の事をきくても。神のあるる
ぞりうのぞくぞ人れうさをゆるるりうに。ぞうさたい非。

ゆくやいなやかよひしむゆく神のわたる也。此哥だにありて云詞にて
意こる如也。一條禅閤(ぢやうぜんかふ)秘林良材(ひりんりやうざい)云 又しらん社をとめの山風
ぶれし時てぞうく哥ま香の明がたの 拾玖大政下 新古恋三 又うらめしのあとのく
牧(まき)の駒(こま)がすくもとれど心にかく別(わかれ)るれを 後成千 五百番 何ゆへと思
ひもいれぬ夕ぐれに待あかしぬを山のはの月 拾玉極新 古恋三 右何もだに
まく云詞にて意の哥には如也 と云。按するに 白浪の波なき方に
行(ゆく)舟と風ぞ吹よりぬ志るべし也 勝臣古 恋一 此哥もまかの字にて意
ふ成也。此類(たぐひ)多し。かく又語(どんご)也。豈(あに)と云字は意によりてかと
うたがひてさ母りにていなれどもかへしてい云る也 稲うもん秋たつ
らさき七夕の手に一夜ひ何よいあるは 良風古 秋上 天の恋ふらみもへ
ろうの鳴(なる)神(かみ)もしや中をさへさくる物かれ 読人不知 古恋四
待侍(おとど)中納言人をはなれて花見待し(られ)け 寄花恋云
はくとしふかずひは気もとりさずや花はえぬとも志らうすきうと

思ひの色は火(ひ)の色によせて云也 耳なしの山のくちなしえて
がなしれ色の下深(くら)みなん 読人不知 古誹 嘆風や春立来(き)ぬと沢かめ
つれ枝(えだ)にも色も早し花咲(さき)にたり 読人不知 拾玉 枝にこもるといふまで咲ぬ
ぬ事也。花をみるにかくしまれて咲ぬたれとし。拾まこもりさと
ちそとだけあはれ色に出て咲也。されるかしへ我も深(ふか)き思し
事はしみきもりあれども。いやはしき蕙(ゑ)されば思ひの色を
もとしさいやとはねよくどもしるあるも也。又しものと比字。
花をみるよりかい出しる詞にて。花もかれ出て咲なる

民部卿百首に 寄草(思ひ)恋

今しふ(さう)にいまやいでんさか草野べの尾は花はしるのこと待を
今 秋の野の尾(お)は花にゆれて咲花の色にもやこひん息よしそろるみ 読人不知 古恋一
今の尾花がもとの思草今ゆし何の物か(みね)思ひん 読人不知 続拾遺
万葉 恋一 本(うら)なしは。おほか意ふるて云也。はしやかりきこころなるを。

尋てもたれこそとはめとふからにふるき蓬がもとの心をぞ　蓮生　いそのかみ
古柄小野のもと柏もとの心ハわすられなくに　読人不知　古雑上　いにしへの野
中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ　読人不知　古雑上　おもひまし
今までさへ久しく思ひこしもとの心なる故。今ハしるよしもなくなり
うり出んやうもはいでこそ。此上すこしも。祝ひ思ふべきことも思ひまへ
かまへの事なれどもいつか。草間堂よ得と

中西入道弾正親王家にて　寄蓬恋

按ずるに。中西の入道四字。衍文欤。又ハ弾正親王家中西入道欤。
又ハ中西の道か。弾正親王家にてよみたる哥と。於作の集此内
よ書入れたるにや。ゆゑぞさし。識者可考
牧あるかね三品より心の恋ことをげいて系バ下かるかなかれ川
此哥の似は拾遺恋一に入て。此家よ入道前大政大臣家にてよみ侍ける
預とちぐりて哥よみ侍りける丹　寄蓬恋　清原元輔

に心を似ならは法師牧まつらねこ三ゑの云く云と有。玉かづらかよひいつら
されとしげの思ひみだれて恋つゝなりん　三　新古今　しかつらぬ心には
牧なかゝる身くつまして牧ますの身ハ人もうけすずかれぞ。
いひもおでこし作りてもことりもバ下の心よ。うるくれともいなどを
げいえとうけさり　思ひあるをればの心の忠はしらずねんこそ
あれ恋ふさ掛を　後拾遺　古恋　逢見てもかくれぬの岩小菅いくそ
もなるれ恐よのそてなく　恭之後　古恋　此哥の句はなり

太膳大夫頼康家にて　思恋

うれ名だに語ぶたくとれば恋しかん煙のそてをうけるけりまし
死しても語りて名をへ残さずは煙のそてをもなげかずして
恋死もすべきれ死してほ。あれハそれを恋て死かし煙也と
人のへまでかき名をかでん事をかよひ心よ任せて。恋よ
死しせしまるも。かでずの綱。煙乃縁ふも如也。烟のそて八俤れ

なその烟ならぬ身の終也

ねぬらむを

今ハ世にきかれやきらん我にてそ人ハあるまじく名のかうけをと
年久しく思ひ来たれども今ハ自然と忘ゆもみるよしてせたらき
名やすれぬらんとハされぬとも他人が我をあるをなるてよろぞ
わらず定めて名ハきれなやすらんとはかき来るすべし也平生身を
嘆かぬ事如斯思ふべき事也

うき名のみもするぬ袖の涙かゝる縁のたきなるをやそくとゞまふ
上句ハうき名のみちるを流るゝとゐひて流るゝとて云心をこめ
よりけて又涙も流るゝとうけていふり心の滝ハ心の滝の心を
たぎりてせきかくる縁也忘るゝ心の急するを縁ハ心也心
の内の滝も同事也　見川のとき下水の末ながれて滝川なく
せきぞ重つる　古今読人不知 恋部四よ　思ひせく心の内の滝なれやおつ

おれど音のせぬこそ　三条右大臣　心の内の滝をせかるゝと思へどれも
其のまゝ小中にも名の世にもなかれひろごるぞ涙しながるゝ也
名の流るゝも世にも流布する事也

中務院入道親王家　忠岑

流るとも何やかんせんとはなれぬ名をと思へなすみてさもりせバ
一二の句ハうきふれにそくむと云物にありけんと云心也涙ゆくによる忘するる
名と世にもとゞまりてゆく涸ともやく也名のありてハ涸ゆく也とい涸が
去りなでも絶ゆではれを名ともしれぬくし去りてバ涸をせくかひも
あらざらじやうへれやせてゝと云物になるべきがうら紀事也ひとつ
いりをとゞまりて涸るゝ人のなかにもわれなるるとゐりてゆくこまる
あるもぞまる名は涸がるゝ事ともしれぬ也

清原元輔　寄縁恋

わかりなる名くるしくかうらかれまだあるのいてれ気もりいでゝ

河内女の人染の糸をくりかへしたるやうにかくしちやう河内国の女也初瀬女新波女なども類也白染の糸おなじく色に出さうなれども名れさらぬ色にあつらんと思ひなせあくまでふかくこゝろに一向に染をなすべし方寸一心也とはしらしをなこもれりなつかしくとも色にいでゝ糸の縁也

恋の中ゝ

為にとくあしびうれひなる紙をもて紙をそこんなふるみでこゝろん湖を思ひもそこぶかうこんの人のいまも非則吾心なるよたんもやえ思ひわんで湖のもれてゞ者よかてわしうれんをとしこゝろ事をそこ紙方をせうどう先悔ひ思ひしたる浅い湖の方へもかもそこ思ひこしうれ事をこんでたふふこうる神のなることを

手ひくく思ひい湖のぶかたのあまれうみたるあてつかうまだ思ひのをいつこゝ事ひくくこゝふかも

民部卿家百首　歌之名之

あしたうつる者とたりやをんうたをしと神のいこうのこゝ
命やい何をいあのあこ知をとをふしかへばわうこあくれ
をてをそんを名さくうれ事なんたをいをてをもをこゝて事のを
云を弱くゆへいかの死ものうこをあるうこをいをいを
清こゝて誰みをたこうて死ぬる命なりこと死ぬまでをこうん
をいをれんがうき事也こゝなりうをたこうるこゝ命にうこて事
事死しうる事也

恋ふ名之云

色ふこゝをうれんをせて濡ひくたこゝ人こゝをせどこゝかの
こゝ人がこゝの言ん事こゝとたくこゝみこゝ事なれいかこゝ名のあれこゝる

事を何とおもしてきこゆるにせ侍りしきと也。せめての詞を上へ付てよめば。我なき何とぞさふ人にもこゝろをなやすにとせめて思ひ侍也。又下へ付てよめば。神ならぬ人の身に治かたくせ急くの侍く見し方にぞ也。せめてと云詞。親切なる侍也。なかにもせめての侍也。又十分になしがたき八分。九分程也とし侍ふれと云なもあり。俗間常に云ハ此方也。又古き哥にも此方へ関ゆるも有。親切の方

枕より跡より恋のせめくればせん方なみぞ床中にある　後人不知　古詠

いとせめて恋しき時ハむばたまの夜の衣をかへしてぞきる　小町　古今恋二

これハ親切の方也。又此集寄烟恋

恋しなん空しき烟をせめて身のなしぬ思ひのそらともなれよ

来不留恋

せめてけるとせめてハいかぞ湊舟芦わけのまたこぎ帰るらん

稀にもせめてと云てこそ我さへかゝる恋もなきまことにも親切の方なれども少ゆるくも十分八九分の方なる関ゆる方の侍るれ

忍涙恋

思ひあまりみなぎる袖のせくハそとハのたきつ瀬の

雑上　いせ拾

音羽川せきいれて落す滝つせに人の心の見えもするかな

音羽の滝ハせきいれて見ゆれ。浅きなみが見ゆるさて也。我袖の涙ハ音羽の涙そしてハなげきども。涙かせかれてもにせにくし神ほとりぞ。こらしせきえずして涙の滝のたぐひなべ浅きゆへ。思ひえねど。思ふ人にあまりつゝ事がらなるべき也

寄湊恋

基季家ふく

みなとあるまじき名ハそそぐしせれどぶる袖れみなとハ波なくともおもひかへず袖にも湊のさわぐこゝろこし舟のよるべしづりけり　伊和

袖の湊。筑前也。名所をよみて。実ハ思ひれ余りに涙の深さをいへり。波さわぐとも云ハ湊のさわぐ心といへるならけて涙のつゝれ

を浪よりあらくてうち出せばいたはしてかの神よ洞の蔭にて藻刈をくさい
ぐさもぞなへそもあらぬ山ぶしのなかにぞ名のたえぬ事
なれば也

恋の中

あづまやうのわらいつめこと波れまぢくれくたんつ恋　こんぶ
山の紅のまつれ行ちかつ波のまつ世は新れ行ちかつ　赤人新古
万三　移ひ色れ行き鳥也。波い白きれ行いつの色てまさられ事也
そのぐくぱぎつうさんしどあつつ名れ立つうを也つ心奇也。立
ハ浪乃縁の詞也。立當青草人先見　崔少府地鏡雑陶三仟詩
移ひいつ立て後い中ぐふ立ぶ事ぶみ色ありなる
始よりてぐ立つ河。思のうぐを立せんやうとそれてはい
うぐはとはぐみぐぶ思いうれて立せぐぐうけうぬのぐぐぐ
あもまれはぐぐ立せて恨い中ぐはいそぐぐ立

えぐぐぐゆぐに成ぐ也。立ぐ立せゆぐき和をぐ恨撥立ぐ也中ぐ
立ぐ和ての方へも立ゆぐ也立せてハ和てぐぐ立ぐぐん
立ぐ立ぐ

重後院立十首よ　弘長

人立立立ぐぐぐいぐと思ぐを実ぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐの立い後ぐ表ぐぐぐ人立ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐ人立ぐぐ我立後の実ぐぐいぐぐぐぐぐぐ
ぐぐん　我立後い人いぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
関寺をぐぐゆる移ぐ成ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ也

人ぐ小白川ぐぐ立ぐ慕ぐぐぐ也十首

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

[illegible]非人のうたてうき事なるゆへ逢もきぬ思ふ人
いかをうらに事とうらくてあらあらかもぬれぬる方にとていかくと
きぬ思ひて思ふてふ心うあらんハ一たのうたはかたけ云きこしたこと
らうふうこうれい博物乃思ふ人のせこしたこうたの人ひ月ごうれうを
うふ心ぬうこふい若ものゞ事にあつて為ひ人ひ月ごうれうを
うとける 法人古歌 春日野ゝ[illegible]ぬ思ふ衣ぬ[illegible]乃れもとゆくうう
ぬゞ 伊勢 竹川の[illegible]世の事い思いぬゞ思ふ[illegible]ていなうれど
竹川巻 かくすい 袖[illegible]乃[illegible]重奏れ本ぐれて志のびくたゆる袖
うれ 空蟬 思ふ[illegible]ハ[illegible]きぬを人志れず思ふて人事志れなゆ
さらん 法人古歌 偽の涙ぬきぬゞ衣ぬ[illegible]ゞ袖いたゞくぬゞ[illegible]
ふ人ふる方い 思ふれど云ふき何いぬ[illegible]乃おてうてうれ
歌古云 心のをうをうたゞ人ゆし 稱ちゞ[illegible]ゞ思ふる事のようるゆぞ
すれ 式子内親王 思ふふは思ふる事ぞ[illegible]ふ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ

乃之が一入うきまぢぴ　秋ハ移ゆくなり

哀歌中

涙をばつゝむ袖ゆゑ　たまりかねたるうつ
涙をばほしみずぞ　我恋のもれやせん　子細いぢ　乃ぬ
うきぐあまりて思ふ人の事をとりばがりなどとろふれそい
人ゆゑぞ　恋ゆゑ　恋ゆゑ　人ゆゑ　いとゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ずめぐりめぐりきぶ　大和言葉　世ゆゑ　出ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
つゝは其人のあらわれ事也　問ひあまりの里人と事とひ同
器へ乃　和いろ　拾貞下　これより出ゆゑ
さきぐるか涙れ　狂をゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
やれゆゑ　涙乃ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ名をゆゑぐさ事　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

いとゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
涙ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
乃ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

をつぶてく投るこそやわんと思ふ也。関は通路と流るる物也。
守る物也。川口関は勢引こそ川水皆実なり。あく強は。きつく
こ拵をして往来を守る也

歌　旅行中

玉れをのくくふんをみくあくまこんのこたくさいみくく
はむのをは命下に水。玉を貫きて緒也。欲林良材云。玉の緒
てこ。三乃名有。一は玉乃緒。一は命下こと。中く
ホ人とわくずは業子ホもたく降物を玉れをとりて
命いきるやすらかこと玉のをとりわんといこと
幸は玉のをづり秋すわくてはくきこ乃水くこんん
は玉れをとりて名のたくは吉毋く川の滝はせのごと
しの玉れ　ホくこをこをさられくふるとけてわいどは何をを玉乃
をけせん太玉緒也又命れ玉也　玉のをよくえないたくこねをづく

へべ来てる年れよりりてすてる古人命也　上　ホくこのくを約ふ乃数
乃ものあれは玉のをよりみたくこねへきくれ　律師答歌　拾遺三　玉の緒をよりて
命ひ命くやう　ホ乃れ明る行まも定なるき玉れをよりみ立つて
ける日者来ぬ者の者とくわり　滝川の滝乃ちくいくくもくく玉
乃をたづねける白玉　桂三　玉の緒也　ホれたれどい玉ろいもろあ
こわるとすれど玉のをおみづうき乃思ひくべど　古長　同し　玉のをとけ
ゆくこたちし同是も玉緒也。玉をつくきくる結ひくみ絲バ
ふでれいせど。結ぶくけてこ玉ホ結乃ちけ
ずていかどる結くんまれも人乃乃の者くけてこうたつさ
と有て思いふでるぐきふんれ乃るくけもとばして。我乃ひくりは
などる結くんとも人のいわ者くけあと拵てこるちるたくく
しけどゆる年れたをせ。たくあと乃後也
さてすがくもにまかりどくと思ひくいそぐゆくなるんならん　ホ　拾遺

さすが有係流石物を一るんよりいきべどこゆにかうの有相
乃色どりをかくるれども人のしらぬ事も有と云ふの有也　三毛
のようなる人乃成行ら所をどうしたゆる物ら　有也　八紘也
ぐと思へとるまで命をさすがふれきこのよい方乃れ　雅子　歌下
思こんすて我意乃ちん命をださすに人や云ふこと　年
月をへてつるこれども今い思いわるて人乃ものをさかれつ
まれを詠めもわるどもこれ川事ものやすぐきてどこゆに
物をかゆるいかれがゆるその事で今ついとしされば思ひ
のあいつとかくてうゆ事ふくちんば云おまでき物をく歌
くせよもの注七夕物ら　委
うれ身にと行こそたのめちれ世の契をちゆるいろうを
ちつかをとしてもかなびかいうくはるきれ我身をれどと。
物も物むれ乃有也ふ思ハ始いはまなくてもはるしやうど

ふの方べさかんとさてこれハ過去乃宿縁のちがいるれば
を物ふてめらばらも世業乃世の契ふ宿世乃業を云也今
まて八悪事のつもしも思の外苦事にたら事のあるゆ也是皆
前世乃業にる事をれいうまを物みてする也

不動尊寺にて　寄出恋

空蟬の身をうんさもたのれぬひるさき中小云や云ふまし
ふ様の身とかへてぐる未れ知ら人びのなろうきれ　古様考
身をうんてるは苦ちい衣をもあけて世事なるれ世ちい死云
心身をかつる事ふよめうゆ世ふえわらずは来世ふわるで中くれ
つるゆ世ふさえわいれ世ふ物形みもある後ど
きるれい平意縁のるこ苦ふ云死あらうてあるふ
歌くせ物れれらひ形ふきこ物也今をけてるるふ　寄
蟬乃をきかんに成まで云れんこ云ふ我ふるこちくて　詠歌

然るに是てんこん世をさるべきものなれば
まね（大江教重 新拾遺一）　うぐひすは春の来れば鳴きぬれど
もとつ人なほ音をもせぬ
仏の事也

不逢恋

はるかなるをとこをもいまいとまなく我身ひとつのそでふりて
恋死なわが身のわるさうぞ
（新古恋二）　世をうしとなげくなるべし
さもうさこそ有ほきにぞ死なるあゆみれば
我ゆゑ
恋しかひ物とせめてうらもとむ
おもひの行里のちるべきあるべし
こは恋ゆゑ死なるべしぞ

（小町古今四）　かくばかり
ちるべしぞ

有と云事をもつて終わるべきなれば何としてもるべきは恨
てもしたい恨ゆゑ死しうらとも云事を
しらぬ後世をもとをもとを
問しは恨ゆゑ死なるべしと事とも
なりとも思ひ出れり也

恋深白敏ゆくすゑ

うき中をとしたくどもうつるのたのをうけそふ
不逢（おはず）してのくるさ人なりをとをもとえばそ彩を
くけそこいたこふい何事ぞ
ものづけ菊をはめそむ字を付て云也がつゆゆく絡みと
かけるもいつ死ばそ
そ教まぎれ名れ（伝）　谷せぐみ岩でるるみぶ人なえと
人ゆゑ思いなくて（伝）　これい玉菊なり女の事とそる

も有。鬢乃字也　人いとさ思しいやすんまろ〜面影のこゝい
こゞろんしつ　家紙注云乃二字　人いとさ思いやしもまろ
うげみんこはく云れわかもの云をとるまうくさり。仙覚注云むろ
らは冠乃纓也女はたゝ云　剛疑抄云むろ〜は女のくるふ物
なれい方ゆもまろ〜面影とよりう云　玉葉　云まろる月いとしたぐ
らまろ〜いうなるすゞらをえゞうきわうん　これも女の事か
よろ。此集の詞も草めろ〜の事にしたて女の事を詠る也

寄川恋

川舟はてるきとゞふさん棹のをよゞめ中ををふとゆうん
深さとゞみい水のゞすりて瀬〜ゆ面也　瀬をせけば瀬〜と
ゆてもとゞみろう別をしゆるもゞみゞをき　岩考　水の深き
ゆ人棹の水底まゞゆるゞくゞ我恋の及ばゆ中をゞ行とてこゞい
とゞこまゞゞとゞすりふちげきそいてゆ也及ゆ中とは美人

なゞゆゆ〜　例　別なく　ゆまのさいはいちと浦ゆ〜をよゞゆ恋も我い
すりふ　俗人不知　彩抄恋二　こしもろる君ゞをゆの月なしゞ及ゆ舟ゆと

新古今　拾川夜中天　上恋四恋三

寄恋

寄人ていかさゞゞと稀ふをけゞ人こて古〜紙りたゞがくれよ　春恋
春事の成ゞゞきくゞゞ人ゞゞゞ〜ゞけゞり逢事いゆゞ
聖をゞしゆふ同〜　是川のゞゞゞゞすゞゞ云ゆん君ゆゞれて
うゞたけるやゞ　万十二　逢事ゆゞゞゞゞゆ人ゞゞけゞゞ恋ゞ紙乃
きゞすのゞゞゞ思ゞ人ゞたゞゞゞゞ

えゆるまくかいてはなを事やわんと思てにぞばてさんをけまだ。
又思いまじてぶーてもぬくしてとぞをれとつて事ってやわらん
まもぞたて　例　あまとぶや　鳥の使いつうもなしれ　都こしばて
ゆん　人丸拾紀

民部卿　家行　双林寺ふくうたくまいくを人をいしいやいとろ
はまもうれんをうふくたくまいくを人をいしいやいとろ
はれるさ人い思ものたくたくられば思ものるさまでぬく。
人をいてふまでの事いるまたぞれ人いくをいてへい思ものたをと
つくろ立事也　例　事ってあれば和也のとけ思ものふも侍ばとにぞと
なまぞ也　万葉　民れもおるさ思ものれとりいたくわてはうとん人へ
もうれ　家隆　は詞のはくきさ也　さとう思ものわれいんぞれとや
思いうへ　伝為　人非草石必有情　白氏

意味中く

はうたとはをたのとしゆくくれ月をとうどとうしそめきん
はうとうたうさあくくも也。たゆ　有ぐうも也。ざれとをとて我思よ
いをを人をとあるをく頭也　はうくもおぞてんとを也ってきれあるふ
をあるめ身をとうぞて　侍　世事いくうもはけそれ月をれやさの
くもとうん新もまく種ぞど　上　意和ーは詞いをくいさをーはをうく
をとぞぬくゆくとうはうはけうけうれ事へあってと和みてづいをう
くるふ思の外まはまうれ人うれば所ばれ事まなうとくうる也。
これを思へばはくくもうはは何を和じをうてをとい和くう事で思
ひをあまぞきものをくも也ぞれ月もとうぞずんぞ人のうけいのあ河
をの和くきまれかくさをもとうとをひくを先ーまをも也

はをとは大納言家旬十首　他意

うれざりに人やはくんこのくれをよぞれをさ人歌くやもしくを
書不盡言　言不盡意　易繫辞上　思ってうついをうふ成わんいたと

へあいくん言のくだもの　拾哀　かげさあるうらゝ安和つゝ
と思ふ計いくんざるもの　源明哭後日記　志上千志一　例　わくれしも　ものゝ程つゝ
いくれ　へくはらいくをあ　あれ　ものゝ和　ものゝ　詞　いいたく
され　ものゝ　ものゝ　我思いを　嬉　よいつた　我詞　えいいたくさねとさ
へ歌　よ　ものゝ　嬉　ものゝ　人　ものゝ　我　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
人　我　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
平生　底　の　意　ものゝ　方　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
あり　隨　分　笙　歌　聊　自　樂　等　閑　篇　詠　被　人　知　白氏　瀟　洞　何　事
等　閑　回　水　緑　沙　明　兩　岸　苔　歸　雁　錢　起　二体　ものゝ　ものゝ　ものゝ
けり　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
涙　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

草庵和歌集蒙求諺解巻第十

梅月堂僧宣阿集編

梅仙堂平景新訂正

寄海恋

ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
貴　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
分　在　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

前太政大臣家　海院　三首　不逢恋

ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
家　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

今世もかくのごとくつまびらかなるべしとぞ。欲知過去因見其現在果恩果經

寄煙

寄るとみんすれば煙をせうそこうみ井しけたてとなるよ

ふじのねはなにを思いよりえそばうえ神ぶたちあくうみむかし烟

を紀のあり古詳　もしめやうえて消るんせ共ちいそうみふじのひれ

ぞく平家文　なにを思いたるかくや煙こみなびく思いをうけ給しうち共

うけしらどして天へよる附ち帝へ業をまるうとおくいてふじよりム

してやうせ給しがばらてふじのこぶりえて烟のさいなと竹取

物語あり。竹のふい忘ゆ人ぶしてを常の烟りを。井ちゑ人ぶ

えて我を思いれ竹どして彼しる烟をくせしも人ちゑ也

なしを思いをい思りけいあ事也ぜうそこは何とそしてやうな

行ちいゆくそうはおくさる煙也とたりくもんようしゑ也ぞし

煙い身の宗ゝ消て煙と滅し事也ゆせそを俗ゝ云方にて

を也ゆる也ぜ集りせあて多くゝ俗ゝ云方ゝ人ゆる也弾ゝ

たくのてゝたりのてゝたあれべぜ入俗ゝ方たゝ

悪不善云

悪ゝるむ金紙ぐあもるげゝるようれゝぐうを紙おゝむゝん

悪ぶゆ人ゝあ善ゝて今いゝ彼ゝあべゝゝ也ぜそてゝあゝべゝ金をゝ人うげ

ゝゝぜゝ紀ゝ名ゝ神をゝ何ゆ人ゝ行ゝむ事ゝゝたりゝゝれゝも悪ゝべい。

彼ばゝゝ人ゝのゝゝを思ゝゝゆ人金ゝゝゝゝゝゝ行ゝむ也ゝゝを也

むゝゝゝ悪ゝ云あゝり

寄悪法師所合　不善云

かゝゝゝゝゝいゝぐゝいゝぐゝ云ゝゝんそゝぐ井ゝむべゝゝゝ勇ゝ彼ゝ

彼ゝゝゝゝゝ思ゝ人ゝ憍むべゝゝ也勇ゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ

思ゝいゝ彼する彼ゝ也ゝゝいゝて彼ゝれ也ゝゝゝいゝぞゝいゝ彼ゝゝも

詮なきまぜそぐんぷらく云ひ寒い思ひ人のまぜ結句
ごみていいもくよく実ぬ

民部卿家十首　洲点

ちとせふるあまのあぐしうるくれわるとあ浦ふつまそりぞうねわる
すまのあまはしおやきぐわのなしうぐしう一日も君をこれてはも
いんぬ六いせの海ち塩やくあまれ芭衣かるもしすれごあるあまふ
ミつ　洲ゆくいうきせるれどやと海のあるれ焼衣まぐ紙ぬくん
微よ女王彩古点三　あしまなれとこを浦ぐうけていうぐ洲ちは世間ひきくム
ゆとく洲ちうふて点の方いく年とくなるしあ非あいきぐ洲る
げううそい我ちふムをえいぐぐんぐうちゆく点よぬぐ。
湘をかしうるぬぬすぬ衣ろ縁ぬ浦ろわしう衣を
いふぐ浦ろムあり

寄滝点

ろうしあく流の白わんまれうムたくこ人をあいはく
ぬんうの滝ろ白あいのあたぎうけぐし風のきもきこ
呪法定頼　はぬ雑上　深ち浦の誓ハ若ぐ白ムるくもうて君ぬ　堀川左大臣　長歌雑五
世のけとムうくこいうれうの烟を身れぐひうて　第六伊勢　彩古雑上　白浦ハ
まれうるぬムろくこいうぐ高大なる後ぬぐうくあいをはをくあきてかるムあ
いうう高大なる後ぬぐうくあいをはをくあきてかるムあ
ろのいうまれてなぐうく泉川いつみきてう点うんぬ点ぬムム
ろうく事にうるムのうきうて高大ム人を点ぬうぬ思ろ
ぬ点ぬきる後ぬ貴人ぬ位ろ人を点るムあうくされ

点ぬ中ぬ

難波人うこいとれど苦れ称のちこれたくねをゆうい波ぬう
芦を刈ゆう枝葉いなくてようはうえれども根い水中にあうて。
絶ねうく紙思いぬようんうそこあは深くて絶ぬかう。

下いなをさす也　歌の思ふ所の所

こゝいまいそ海松ぐ海松をまつ〻ふく海松よりの家も波そうきくる

大伴のうはの浜の松ぐれを枕に海松と家〻世まりの一方　信乃

江の浜松ぐれのちとそてつみるをの〻まかりうれ　百十　松ぐ海

を松ねて海〻ぐ海ぐ海もかくべきに松ふ〻て海ぐ海ぐ海なり。

思ひあるゆく床に信のくるもしぐ浜の事をいそ

海〻ぐ海ぐ海ぐ海のぐ紙だよなれてちぐ〻ぐ契うぐもうか

思ひくも紙ぐ海ぐ海ぐ海てあはねゆくぐ海をもうされいちまき

どぐ海ぐ海ひあはぐ海ぐ海ぐ海

[illegible]奇也。涙の玉也。人恋

寄級恋

先ごろあふ程をいはしとちぎる称た人あいこきでゝ料[illegible]れ下ゆび
[illegible]の[illegible]れ及いかゝぐりつるゝも約過りてもあらんらで思[illegible]る
なよ程いふあまよ[illegible]めもこそ月のあらう[illegible]まて[illegible]の
井[illegible]れ下[illegible]ゝ結い形みゝらしてなき世也ゝう[illegible]世[illegible]大
和物語ゝもいてゝ詞ゞき長しゞ[illegible]れ全体も。大和物語ゝ[illegible]
よゝう。続[illegible]長河[illegible]ゝ[illegible]。一首ゝ[illegible]。一度[illegible]
みかさねてゆゞう[illegible]ん来いんゝもちゝねゞ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝも。[illegible]けいすもゞき也。[illegible]細い。始[illegible]ゝ[illegible]我[illegible]を[illegible]
けて約束を契ゝゝも。[illegible]ゞ来ゝ[illegible]れいも也。ゝう[illegible]ゞ
ふも[illegible]ゝ縁也

老恋

月をめゝ老ゝうるまでゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]月をもれゝゞこゝれゞこのゝれゝれゞ人の巻ゝゝゝゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝとゝゝゝゝ

こんばのぞいきやうきんと思て我この方しゆへのの何ものにかすらいてまつさの也ぬをとてわとはぬのなかなれもをあ後也なりしとい。
数々のよ思いてゆくる紙をるいといてり

民部卿家百首よ　寄煙恋

恋しきん方をゞうけうで我ゆへのきりに命にて名ごしみく
恋しきん河の煙をゞよ人がゝてさそた我ゆへよ恋ゞしきふ
煙也とこゝもとこゝば我ちをるまゝゞぬてもゆげかゞゝ也下句
よりよへ返して見る奇也んてゝは下句にて云詞也一首の心
ゝもかりん世ん見いいでよ我ゆへ命絶しへかて　後拾遺　金葉下　是より
出ゝる他人を作て我ゝ云詞　天をのゝたにのゝしゝ
事い我ゆゝ心風をゝ也　侍物　海ゞ岸ゝ命ゞ人をけせ
云我也をのゞゝゝも同し　我宿ゝ形ゝ吉神に若ゝ
わゝゞかゞゝをけゝゝいせあいせ　後撰　夜寝よも出ゝり

聖護院入十首よ　不逢恋

ゝいしゝんいのちゞはけたおしゝゝゝうゝ分い人れいとよのゝかい
おもり思しのゝりゝ也ゆゝよ今ハまれと我ゆゝうゝきゝりゝもゝれい
我を思ゝ人がいゝよのゝちなゝゞゞもれとけゞゝさゝいゝゝゝゝゝ恋
ゝん今い恋よわゝくいわゝゝね也　御　我ゝ身をゞ我ゞたいゝよいゝく
ゝゞゝゝゝゝゝ

なりたるを。変と不達して。手をうるゆへ。つまんもさらばしてう
きを。中の思ひと。我との中を

民部に入首　洲亥

うしかぬ中ていぐるぐるしうきをつくるも。ひくをなるしい
洲亥い。亥墓の方れをそはなく。世間しきるそ。ゆがひょうや
すく洲る後也。かれ公ハ人のうとれいくるしくるしうとき門は。
うれまもはくさまもよそながらにて。蒲公なる狂をしだ。と
こそにて。亥乃公をいいぐさんと思ひにつんすゆ。公をとく。
世間庭のうて洲まれだ。うれもはくさはもくとる狂
まをていハ人はくはく。何とゆく。亥墓乃公をかくくともいいぐく
ゆへいよく公ぐるくきをいいぐは弥也。ことよと横通也弥万
亥の洲亥乃西川合ゆるくい

浮子た大納言家三首之　不達亥

浮子をもるれ公れをそをこはゆるゆ亥弱ゆ
吾亥ハ行をもちずをもをずをもをかぎりとふりぐこ
をそをゆ年をゆるもゆ達ゆるゆ紙かぎりふと思ていた年をゆくと。
達年れなくゆをゆるくてのこゆる年れハくハ畢竟はてまなれ
公のをそをゆるばりはて。世とハかをゆ達れ年をもをそをる
ふ年ゆ也。をての字。浪うれ字ゆけ合をそゆるゆしゆそと。弱うと。
用し狂なる物をれしもゆふをかきうハ前方より行ささをゆ
ゆくゆを也ゆ達をるさのをそはゆそよゆ。現在眼前の年也ゆ行
乃而ゆくうくゆを分をゆるゆしゆ弱をゆ分ゆ

亥の歌中ゆ

山来れ契をゆ行くをゆ人世をうしをゆをひよりん
惣ゆて世間の年ゆ始若をて。終ゆ要ゆ。始要をて。終ゆ若なる
年ゆ。儒道をていゆ。氣数乃運ゆり伝はりていゆ。前世ゆ因孫

あれいで定てけうがうぞ。我ゑも。人の公の。今日こそ。けうくう
くも紛まゝていとゝ。きことをこそ。ねがひしよりゆゝさまゝ非。
けよく思て来り。ゑを待くきこゝも也
ゑてうん後さくつしたる紙ごうふあくれといとん人れこゝろい
今れぞくつき人なれぞ。ゑこゝろい。ゑこゝろよりゝ。ゑ紙ごうに
紙の事やとゞうついて。まつ。ゑ。ゑの事やゝもつまゞきゑまて
今れつゝきのこゝろ。ゝゝんねまぞさ人もけゝくゝいるゝ也　ゑゝも
君だよいゝぐゑゝもゝびてゝゝうん今をわゝうゝなくに　源経基　ゝゝゝと
いつべゝゝ人いかりゑで。ゑのいつゝぐゝふ。ゑねべきふ　一条摂政　拾ゑ一　拾ゑ五　此二首よ
つゝ出ゝうゝ。ゑ紙ごう。ゑゝ。謝ゑゝよゝ

賜如来くゝ示よみ待ゝふ　寄雷ゑ

清ゝゝんゝぎうゝいつぐゝでゝの祈れゝゝゝ神ゝしゝゝ雷れゝ下ゝゝゝ
ゝゝでゝのゝれゝなゝゝゝ思ゝいよゝゝゝしゝゝゝ祈ゝゝゝゝゝゝゝ神を　誹

ゝゝゝ思ゝいの浦。ゝゝの。ゝゝ烟。ゝゝゝゝ。ゝの。ゝゝゝゝゝゝゝゝ思ゝゝ也。ゝゝ
ゝゝゝいゝ。ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ

祈久恵

みそぎしていくとせうきんつまてしハ行ゝとそろはせとうの志ゑ縄
ゆそぎしてぺいく度ちのなハをうけて行まとも。のを意事ハ雑
きゝ也。河原杜。賀茂の社の内ゝ有 弐きゝ也みそぎし川ゝ也
みそぎ祈いうけども成よけん祭 伊勢 の類賀茂ゝ恵を行る
事。古来の俗也みそぎし川賀茂ゝ有。此祈ハまゝ也

祈身恵

さゝ〇川いまいみるいをきゝ孫ゝやみそぎしうきん波はさゝゆゝ
みるハ。水の渋也 考向の拾恵いゝをして行ゝられみるハのごゝ也
世をゝ我ゝ見る 人丸拾哀 ゆゝとゝに流て祓を行。湖川冬も氷ゝ水みる
ハ也ゝゝ 古恵二 奥之 行ても不安。うきゝにそゝうして。ゝゝハ祓身を水の
あハのぶゝくきゝんすゝし行るへゝ也。水泡ゝ身をいひうきてゝゝり。
かゝんハ木綿をかくゝみゝて行とうきんゝゝ云也。本舟。山場也。

本毎ゝ恵を行ゝ事ハ男ゝ恵ゝて行ゝ法本毎にまいりて
人ゝゝ〇川ゝ雲のゝゝ恵ゝ和泉式部 物ゝ恵ハ波ゝ
雲し我身ゝゝ不くゝし出るかむゝゝてゝゝ 伊勢 ひかりし浪ゝ恵
ゝゝ〇ハ浪ハ白ゝ物ゝゝ人ゝ事ゝゝ

伊勢中納言人ゝ恵ゝて言ゝまゝ

祈恵

木綿ゝもて祓をつまれゝく行ゝハ行ゝハ行ゝもゝゝ人ゝ恵ゝ
ゝゝゝゝる祓のゝゝきゝもゝゝゝ今ハゝゝ分れ行ゝけゝゝ也
人丸万十二 拾恵四 ゝゝゝゝる祓のゝ伝もゝゝゝ大宮人ゝゝみまくゝゝ
伊勢物 伊勢物の内も万葉れ恵ゝ行ゝ祓ゝ井伝ゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝの恵ゝ人ゝゝゝゝゝゝ行ゝ也。ゝゝハ行のゝゝゝゝ
ゝ。ゝゝゝゝ情強くいのゝ俗也

ゝゝゝ也大納言家十首

祈祓恵

おつたゝりゝゝゝ伝ゝまゝれゝゝゝゝ祓

名をしれるを見て名をよばれる仕合
みておどいざ来とて人いとやなりやめて 作物 人ハ
しれる名を取られるつもり人ちれでくるよりもあ 元
名をわれてあだで有べきこと 作物 茶の湯の神をたのみて 一言をいふ
しませばまことなくもなくて一言をいふ
ことなくして給はれく行る也

行元

くるをうるる神ふみをきてうたをいてくはらうん
元也でやとてしかるせてみてき神いらけども成るる 作物
はさかりてとろうぞくはうは道理也ぞくはるい清らなる也
道理をいくさへいのをば神ハ元也の頭よりゆるくるくるる
物也下句ハ神ハうけども成るるかのみて神のうをあぐ

うるる也ぞのうはをいくて神とかくら恨るハ何事ぞ也 此
元はけ全体此未平の方を評判してもるる也 恨ぞて元いる事
を詠ふして行るぞ本元たるに業平ハ元をぞ行て元ハ道
理をあぐいるるゆくに神もをすぞれ少く行るほにぞくく元
しく流るるぞうたて神と迷惑しぬハいてたぞけども成
みるるれぞのるハ何事ぞ行ぞ事うぞあきぬ也ぞしいを事
みて行るぞ丹誠を尽して行るるいて元と一前小こるそこ
元也ぞ洋ぞこれ方也工夫とよく

茶道大術を家わく

荻ぞの方ふにけてをとるれ風を吹あ人れこ行こ

秋風吹ぞ行ぞもこんれ荻のくうるば方いるそます 中勢物語四

ぞくるむるく敷ぞるも世ぞれるぞ人ハ仏ぞ風も吹あ人ぞ 実之ナ春ト

荻のくをばこるべこるるぞ行ぞ荻ぞ行風

月に吹あくるくつのしたぶくさくつもしぬべうかなしかりけるかな

金蓮寺のく　家月を

ながめいでそよかれなぐさのやどの月を袖ととうてん

涙やへ入もらぬべきつまれんたかうち弁いたぐにちぐさのれ　道雑拾遺上

袖にわかつ人まれなぐさ九月い浮世のあるうやゆく　大江為基拾雑上　伊津

もも人の言ぐきはい浅ちかけいそれしよはぐれてなぐさむやう

ぬれぐ。寒しなぐさ夜どさあるうく月をうんてなぐさあるそや

ら月もうれをうしいそ神ぐうるんとも。なぐさひた世俗よ。ひ乃

う秋くあるく事とうく。よい詠也。真事につうそ出ぐき事とまれ

らうはうとう後也。秋紅月ぬ

九月十三夜清子た大納言家十三首ノ

寄月恋

くるかぐこと人ふいいでそよあくの月を汚れぐく涙ふぐ。ぐうふ

月やうくもうと人さ月をうはいるぐ涙ぐうるはのぐ恋かるる　中務拾遺三

涙ぐうるお言也月をうんれば一入思い出ぐて涙ぐくるうこぐされ

ぐも月ぐうるあぐいぐぐ言ぐうて涙ぐうるうぐ人ぐうぐうぐ人ぐいく

みぐうるぐいぐぐ。ぐうるぐ。ぐうるぐ月をうんてぐ。ぐ人ぐうぐ人

ふ也ぐれぐ。ぐ秋ぐうるぐ也ぐうるぐ也ぐ式いれの涙ふぐうく

恋ぐ月ぐうるぐいぐうるぐ人ぐうぐれぐ也ぐ　藤原定家朝臣

一首のふ仕方

大納言家十首

八月夜恋

くるれぐ。ぐ月ぐうるぐのぐ。ぐ。ぐ。

さて。をるんてう。と月を見るぐさ。こと也。杜子美詩に月夜。今
夜鄜州月。閨中只獨看。遥憐小兒女。未解憶長安。香
霧雲鬟濕。清輝玉臂寒。何時倚虚幌。雙照淚痕乾
月ゑんとし。ゑうてあ。ゑんのこゝりやこゝへ神ゐ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ行ゐ　ゑ紙　ゑんゑ
ゑうゑ。ゑ人ゐ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ

まさうやいすることはさうやさうがとはぐさ　ものの
そこと屋く塩屋の煙をしるべとよりて火の海さう事は
ある時ぎ小舟に乗り思ひいづる人のを恋てゆくさるまに
いまれてこいの海さうて脳を屋くも　みうきすると思ひ
つのうちよりえてひろはさえけ　ねをこそ屋く　袴らひ
まば寺来我方小ふることそはされ志の云い　春遠別物　引合をくし
浦子た大網言ふ小ふなる所ふく云ふ事也　河

寄衣恋

恋ひだふまぐ紙をまどはわる人の神ふもまぐへめ多く　計そ
ずまのあまれ塩焼衣ぬさ紙あるみまどをしあれや君ぐきこ海
さえ　後撰集　ちれしゆくいうきせるれるすまのあまれそ袖衣
まぐ紙めん　拾遺集　衣のまま紙はわくさきあ小糸乃河の巻を
き物也人の巻の事小河乃ある紙ままをとつまはよそる也

海ふ乃ふ神を恋ゆくふくれん事れうをれはあまくい神よはぐく
ふくい思ふくもぐ乃ふ衣よあやうそ人れふんあまぐまぐ紙ふう
ばうき事本也恋ふくまぐをふあずいふふくばうはあふくれ紙ふく
まぐてくれふふ也ぐ小真疑也ふく仕こ海ふふの物ふふふふ
行ふ乃紙也

陽恋

ふぐまこ　ものいふそなきれみくまの浦ふをられ奥乃ほくふ
みくまの浦ふ遠ふ行舟我をばふそふてぐそけ　舟
の浦ふ遠ふ行ふ人ぐ仕ふ恋をぐるを思ふのふふう神く
ふふぐふふふ　ふふふ　ふふ　ふふ　

入道前太政大臣家のもとにて

久安

ふるさとのなかのしたくさ　ひとつまつ　ふるきのみちのしるべかな

ひとつまつ　ふるきのみちの　しるべかな

をとろかす神振のこゑ　垣のくすしさ世よりいとふ神てき　人丸拾雅冬　揚

雜　社頭の井垣の事也　久しくこそ云枕詞也　年を経る間　人丸

人のみをつくしてくるわをさかもとも　ちぎりくるしきこゑ事

うれしかいつぞいきんと　れうし事のうれさよりも也　垣　内かと　湯

はる　なれい人のつをつぐろる事にてよくていろ

前大納言家歌

被獻歌

ひくいろをたどる　なかされそふ　ものさびしきもあはれ　成舞

雲もまたなだる　朝のこゑ　れてのこせをべ　人別　古五五

ひくぐろはこれわ　ぐたこゑ　後也　ひくぐろひつわ　ずは　ゑ　この

岩根しまたてゑるまし　ねを　二方　くけりゑぐこゑ　ゑ世れ中

にてこゑをたる月　雅上　おざたる　朝　ゑ　ば　ぞ　おれ　ぞく。

我思ひのこれ　ぞ　人よいとる　ゆ　思ひいとれ　ね也　事　れ　ぞ

ゑ　ゑ　和の字　て　天氣のやつ　で　風も　雲　ゑ　ゑ　の　ま

しきこれいく　晴　ゑ　ぞ　ゑ　て　ゑ　ゑ　人　歌　ゑ　ゑ　れ　こ

免ていつ

前大納言歌

遠恋

思ひ出よ　ゆ　ゑ　尾上れ　清　を　だ　ゑ　ぞ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

清　ゑ　を　ゑ　きこゑ　物　ゑ　ふ　同じ　尾上　の　清　を　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

おう坂をいうちそんうもたのまれどつくる関絡れつき河よ
前の方と同しく書き表す奇也　かちぐのうちれしわれ
あれど人を坂の実はちそんれん　人を事にはよみ
ちる奇也　いつちそんとも　れまれずにいつまんとも　れまれ也
あくん実坂はお坂の実ちはれ　ずして甚の実ちそ　ゆくん
は不破の実　悪柄れ関　震実　白川の関　なくかずくの実を
ぶそくきゆく　坂をえこえ　ゆくして　我中に人間の関が
さわりをなすふよりそえあわる事をいう也

清多た入道大納言家十首　寄雲恋

いうふて　ふちれあちう　の角いちのふ　ふるをうくん
逢坂　名　いい　坂とこゆ　しいい　人を事也　無れど
逢坂は都より近き　ちれいこゆは　ふれ事也　さて　坂の
いくら　坂の関いい近き　ふるをいくゆく　絶て　逢ふ事也

くもゐ人れ公のはるきゆく　坂をうえて　逢事のけらは　近ちこ
坂の関　千方里　けくれ　ちれと云物也　いそ　近　逢
坂をえこえずてげろ　ちたるぐち也　関い　往還の道　あるべ
ち路よりそいて　管子曰　堂下　有事　十日而君不聞　此
所謂遠千里門庭有事　朝年而君不聞　此所謂遠
千萬里云云　杜詩曰　尤工遠勢古無比　思尺應須論千
里　ちくこ　も受よ　ちくい近　思ふ中　ぎ　ちくけ　ちる
ちくふ　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ
遇　逢

こり　ふ　こゆ　ちくみ　ふ　ふ　ふ　れ　実　ちくま　ちくき　ふ　ちくふ　ふ
ふ　坂の関　まち　ちくき　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ
中方は　実　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ
思　ちくれ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ　ちくふ　ふ

見てはゆめ夢事のあれこそ也。周禮に曰、占夢
思いれ孫し夢うれい我ものうれはこそ也。
占六夢之吉凶一曰正夢二曰噩夢三曰思夢四曰寤夢五
曰喜夢六曰懼夢云云 列子周穆王篇云夢有六候一曰
正夢云云 周禮同之注曰正夢先兆之夢也噩者夢中驚
噩而覚者也思者因所思而成夢也寤者夢時見覚時
事也喜者因有所喜而夢也懼者因有所憂懼而夢也
懼與噩不同 名義集曰善見律明四種夢云云 世俗ハ
思夢也晝見所夜夢ともいう

寄獸恵

とふらさつと井のうるこのくてのこわるちてとこ云ハ海ふん
かうもうく伏猪の床付かををすみさこそ祈こうのらばもか
拾云 ふ深きこふ猪ハ岳ものこ人ふ猪ハ岳ものこ人ふ

よふうのうもかくこふ猪がかくこをうくふあくハ同しかうもくこふ
深ハ名也それをかきあつあて伏ものこふ猪ハ名也それをかきあつあて伏ものこふ
猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也
ひくのこくこのこふ猪もなくてばうこ也こふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也
らばふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也
てふうこ云こふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也ふ猪ハ名也
茅拾陸貼 大臣家わく 契恵
濃うこそ契るふつもそうれ身ふハ猪いうこれ猪ぞこうこ
ばわこ人の俄すくなこいうてこき所をしくこ何ふ。あ
まうこく猪んこうこ契るふ分そもこうく俗こもあうくこそこ
ふうこく也

契恵

まもにさんこうこいいうこ人ふれうふうこ人ふれひまをこうふハ

まれはさんいんの人のうち我はさんぴんの夕暮てに紙をしてえいとうね也。
一本まれはさんかしゝ者いんぐれいつてえいとうあさこう。私方うもぴえい
とうあ也ゑ細いん人目ろいろ紙をちゝ縒べぴつれ夕暮てんしゝ縒ゝて
こうぴ通べきなどのもゝまゝゆく也ぴ也ゑいんドゐもしたく咲ゆゑ也

古大臣殿よまもせ也ゝ小野社こ首よ　夕待恋

きゝれどいたがいたりもはゝうゝ夕れそのゑれ也ゝゝもど邪
はゝれどいゝんぴをまゝこずは也ぴゝたゝとゝわがゐるゆくゝりぴゝと
まゝ種でゝそゝとゝゐはいん人ゐ偽のつゝゝゝ也ぴゝ夕ゝゝ云物がうゆくい。
待事もなくゝさあるゐゝいどくゝ恨ゐはゝゝさもゐるはでゝきなど
ゝ也ゝゝた夕ゝて事れなくてゐゝゐ歌也ドゐはでゝき事とま
はゝゝゝゝはゝゝゝ也世のゆゝそゝて様のなゝゐをゝ也
ゐゝゐはのゝけゝゝ後し　業平　古春上　哭ゐなゝゝゝはゝゐ白ゐれゐれてゐゝび
しゝき別せまゝや　業平　古四　月の内いみるまなゝゝ見ゝゐんゝゐんてゐ

少をうゝき也すゝゝさん　後人不知　拾春　なゝ後世は時ゝ海ゝ歌ゝ同じ侍ゝ
なゝ種ゝゐゝゝゝ　業平　拾春　此類也ぱるなれ来ゝと海ゝけていゝる云ゝ吾也

聖護院五十首よ　侍恋

たれゝゝゝゝ

古今人を清くつけてこそ言よかりと思ひゆくよくるかさん
う枝きさいついも我人々思ひ出ぬといはんして行べき物なり
ゆとをあてい一向ときいわゆくいよく物まれ人々なるべくる
さくう枝きさんに行ときて思ひ事でこも也

後園屋実白家おく　毎夕待恋

今ちんとたのもをく日いをけまたをとぎりと法ゆべるか
我をたりをもちてばそてもをく紙浪と思ひばうそをを
月ちんといのばうれも月の上旬の月とはいでつるか同四　今
えいつうんとを色て日をちて物めをきうタいをけまどもぬかく
をきたと思ひ公ゆいつまでも色日をのぎりたとはうハ一日
ちもすこをタいたれも沼こ云間よ毎夕れ公をれう

民部卿家歌合　恋

人ちんとをるをきを物を伝ノちぐはそとや契くをれをん

こをを行をくをきき物人もをるをつをも当座の公をを
をあをせをくれをる人ををそ伝ノちぐはもらべきこ契うを
きはんををををれて我いを実に契ちしを思ひて行は
人ちをきを物也なをしぬれ事を法ぎうををうの伝前を

海人の恋　寄縄恋

いせの海ノ海ノ海する海ノ海ノ海ノ

はゞ侍ゝれもいづくの仏の御ちかひにあらんずきもなきもの紙ども
契り来るまに来るもすべきうとぞ紙ゝの義つゝんゝ定うかゝ
て定うかゝ侍ゝ侍いとうる也

長秀家のく　寄紙恋

滝津瀬よりかくもの紙のかゝりとて拝みくまうの紙かゝるかれ
滝はなれいるく落る滝に非ずすぐ流のゑたぎうの也やの也
紙をとゞまぬ波よりかれて今しも紙いかゝみよすしぐ流さんど流
来にはめもいうゝはゝ松とうけうる也ずのさんれをくれゝをまれ
かけていうゝきくて相通方也和名曰櫓和名久礼有櫓櫓楯櫓壁神也清少納言

櫓階とも有ゝの公紙ゝもとゝれゝいつゝくれやんなれ来
なれもゝやくる来もあんと毎日ゝをかされてもうる也
例大内川みるハちゝくゝ紙の湖ゝ多ゝし紙のすゞゝこの世や後撰雑中
大井川人ゝもゝゝゝ今日やさい松ゝ紙ゝれを侍ん

不動恵寺ふくゝみ侍ゝ　侍恋

とゝまゝゝバ　ゝはゝ来ゝゝをたゞゝうゝきうをゝ
人のうちゞゝゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ侍ゝ来のゝゝゝ
ゝれゝもうゝゝ侍ゝとゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝれ日ゝうんゝ来ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

民部卿家八月十五夜十五首よ　秋夕侍恋

秋ゝれ日ゝ極ゝく言ゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

言るかいもなくぞいくる事はをそれを侍ぬい一入くるすきも

清子たち大納言家ふく　侍ぬ

つけあとと行くやたのもんうれて人うまれて後ゝ世もいりぞとる

ゝるゝ武侍亀てゝ今年と世りてゝ門の内いとゝぜさていまゝ行多は

ふとゝんとゝしくぞをくくるんかゝんぞ秋いうみるるも程形て

まんへゝも思いもゝすとするゝん思ゝこゝすゝるゝも程形て

わるゝんを

契ゝこゝ中ゝくゝうけきゝゝいゝぞふゝいゝどゝれゝたのゝをゝ今れど

今まゝでゝゝぞゝゝくゝゝやのゝ家ゝくゝゝてゝゝこゝゝぞゝ今ゝ夜ゝ必ゝゝゝゝゝゝ。

ゝゝゝ今ゝ秋ゝゝゝいゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あまり待まどひて長月のつごもりの夕ぐれに
ようやく長月のつごもりの夕ぐれに侍るに
をちこちのよもぎ
をちこちのよもぎ
うらぶれ
中の年は
さうもの
中の年は
さうもの

俊成卿家に
くれがたに
思ひしに
いそぐ

俊成卿家に
くれがたに
思ひしに
いそぐ

俊成卿家に
くれがたに
思ひしに
いそぐ

大方にはなりぬる也。詩意よりも出でたり

二條入道大納言家のて　契徒意

さてもいでこむ方もなきやうなる紙ざうのいつくしき人れ書のごとく

紙人のをとこ紙思ひて一向仮名にもいとくすくすかに紙ざうに

いとしゆくもなきず見れてこそ事もあるべし。ことひこりんとくひ

しがひもれやたるまきにくに氣をつけ井ごろうて面ぞがおうし

思ひいでもてこいやをんなどんにも也。ものでするいぶでせうげるを

いとんも也。若菜下

待宣意

こもんに住くちをいとをのわもれ紙のうきは紙まるしとかくこうん

世紀毎夜行もこず。今夜も入雪より絶くてぬくやこよひ

のそもの紙也。もの紙乃うさは別路ぞうも也とちいしは何

事ぞ。侍雪ふ人いこす。雪ふくれ紙ゆくい別路よんも

うに物をとも也。今雪もふ人。毎夜に行そのよにごとのいりくこでまに

なりうえ乃ふ紙しぬ。雪ふ人夜行もしてわたぬふ。そ一夜行まも也。

子細ハこの句より下にて今思ひとべ。今夜行ものとうて行夜よ。鳥乃

孫のうたしい事をもうるとうも也。毎夜行てふしていぬ。

乃うきこ人。別けふわうに行事のかそうきと云ひはぬ。

方うもう第也。ものしけどもそうるべきにあうをぬはもそうる

いうふうこうに詩う事也。茶方の事にもそいうき給うすうを也

仏をつけそ乃ふ。ものそ云明わいかうる也

氏紙卿家百首よれおんを

ものけわうをうをみんとぞふもうまふ夜をしうるくうれて云小

人を待面て文りまく今うをもさそうはくをくこあ事紙

いいて夜の文行をえ拾しーとをえ四よ人いこず。そ鳥乃

時ふまぬ人うにたいそハ文行事を拾人と思ひ事ハさそを

あ[illegible]こゝ[illegible]花也こゝ[illegible]
けだよいさ[illegible]
わ[illegible]

恋の秋の中ゝ

[illegible]
今[illegible]
しゞ今夜も[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

肯口傳下夷彷遠忘ふし此ら稼有ふさりて十八九合の名ハ

民部卿十首よ　曉待月

雲ぢ分けあけぬとたゆむ程をくるまやうやうみくれてきりぎ

雪ふる待て未夏てもこず待まどきと思へどもさらるまるうち雪月

のまた関寺の鐘ゆへよりそこちるうめ曉よちるまそハ関ちも

秋乃明くると思ひ沖ゆ行ゆ稼ゆへ稼ゆ稼ゆ稼ゆ稼ゆ稼ゆ

来てやらへべきと待ふるくゆ也ば行ハまぐゆ也雪月ふる行て曉もまぐ

行也通路の関寺伊勢物語に有ふ第ふ出ふ